

保育現場における両義的な場面での 共感的理解の態度を育成する

— 演習・実習と卒業生の実践を通して —

Developing the attitudes of empathy at ambiguity situations among nursery fields

— through drills/practical works and graduates' actual practices —

勝田 みな

Mina Katsuda

〈摘要〉

子どもたちとの信頼関係を築くには子どもたちへの理解とかかわり方が必要になる。子どもを共感的に理解することは、一人一人の子どもの気持ちを汲むと頭ではわかっているにもかかわらず、保育の現場では複数の子どもたちが対象になり、多様な場面での子どもたちを相手にしているため、共感的理解が困難になる。それは、保育が両義的な場面だからである。そこで本研究では、保育現場における両義的な場面での共感的理解の態度を育成するためには、どのように対応すると良いのか、保育者養成校での演習・実習と卒業生の実践を通して検討していくことを目的とする。

保育者が子どもたちの気持ちを共感的に理解することについては、学生の教育・保育現場での経験がほとんどない環境下であるため、実習や指導教諭、現場の保育者から学ぶことが重要になる。保育者と子どもの1対1の関係と保育者とクラスの複数の子どもたちとの関係では、どこに焦点を当てて共感的理解を進めていくのかを、適切な子どもたちとかかわり方についても考えていき、保育者と子どもたちの良好な人間関係を築いていけるようにすることは、今後の課題である。

〈キーワード〉 共感的理解 受容 両義的 保育者 子どもへのかかわり方

はじめに

近年の子どもの育ちや子育てにかかわる社会の状況については、少子化や核家族化、地域のつながりの希薄化の進行、共働き家庭の増加等を背景に、様々な課題が拡大、顕在化

してきた。また、今般の新型コロナウイルス感染拡大は、人々のライフスタイル、働き方を始め社会に大きな影響を与えた。しかし、こうした中においても各園は保育を継続して行い、各園が果たす役割はより一層重視され、国民からの感謝の声が多数寄せられた。保育関係施設が組織として保育の質の向上に取り組むとともに、一人一人の職員が、主体的・協働的にその資質・専門性を向上させていくことが求められている。保育者は、自分の仕事内容に応じた組織の中での役割があり、保育の専門性を生かすために必要な力を身に付けていくことができるよう、子どもの成長にふさわしい生活の場を作り上げていくことが重要になる。乳幼児期は、生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期だからである。

学生が保育者になりたいと思う理由の一つに、「子どもが好きだから」がある。家族や親戚、近所に乳幼児の子どもがいて自然と世話をする機会があったため子どもたちとかかわりたいと思ったり、中学校での職場体験で保育園へ行った経験から子どもがかわいいと思えたりと、きっかけはさまざまであるが、学生は保育者になるという夢をかなえるために入学してきたのである。梅田らは、「保育者にとって、保育の対象となる子どものことが『好き』という行為をもつことは、子どもと保育者の間に築かれる開かれた関係を創るための基盤をなすものである」と述べており、「保育者は子どもたちとの信頼関係をしっかりと構築し、『好き』という気持ちを大切にしなければならない」と結論付けている。学生が漠然と「子どもが好きだから」と言っているのは、実はとても重要な感情であり、その初心を忘れることなく持ち続けられることが、保育者として長く継続して勤めていくエネルギーになっている。

子どもたちとの信頼関係を築くには子どもたちへの理解とかかわり方が必要になる。高橋靖子らは、保護者の望む保育者の共感的関わりの中で、「保護者は子どもの成長や個性を受容的に理解・対応することを保育者に求めていることがわかる」と述べており、保育者が、子どもの思いや願いを察知して、その時の状況を捉えながら共感し、子どもと受容的・応答的にかかわることで信頼感を得ていくことになる。保育所保育指針解説によれば、「一人一人の子どもの気持ちを受容し、共感しながら、子どもとの継続的な信頼関係を築いていく」とあり、子どもの人に対しての信頼感は、保育者が一人一人の子どもの気持ちを汲んで適切に応答していくことが継続的に行われることによって育まれていくのである。子どもは自分の気持ちに共感して応えてくれる人がいることで、安心して行動していけるようになる。保育者が子どもと向き合う中で、保育者自らの思いを子どもへ返すことによって、子どもも保育者の存在を受け止めることになり、保育者からの温かい受容的な雰囲気とともに自らに向けられている気持ちや期待を子どもなりに感じ取るものである。この子どもへのかかわり方を通して子どもたちの心を豊かに育てていくことになる。

このような保育者が、子どもを共感的に理解することは一人一人の子どもの気持ちを汲むと頭ではわかっているが、保育の現場では複数の子どもたちが対象になり、多様な場面での子どもたちを相手にしているため、共感的理解が困難になる。それは、保育が両義的

な場面の連続だからである。そこで本研究では、保育現場における両義的な場面での共感的理解の態度を育成するためには、どのように対応すると良いのか、保育者養成校での演習・実習と卒業生の実践を通して検討していくことを目的とする。

そこで、本研究は次のように進めていくことにする。まず始めに、学生自身が共感的理解についてどのような経験があるのか、特に話を聴いてもらえた経験から共感的理解について整理する。次に、幼稚園教育実習Ⅰや保育園実習Ⅰなどの実習を通して、学生自身が身に付けておきたい受容的・共感的な態度を省察したり事例から学んだりして、子どもたちへの対応での困難さや苦勞から、両義的な場面での共感的理解を深めていく。そして、卒業生が保育現場において共感的理解をどのように展開させているのかを知ることによって、子どもへの共感的理解の態度をどのように身に付けていくのかを考えていく。さらに、幼稚園教育実習Ⅱや保育園実習Ⅱの実践時に共感的理解について学んだことを少しでも活かし、共感的な態度を身に付けて自信をつけていく指導支援を進める。

I. 共感的理解について

保育に限らず、共感的理解というのはさまざまな対人援助の仕事で使われている。仕事に限らず人に共感したり共感してもらったりと、人とかかわるという点では外せない内容と言える。

1. 共感的理解を示すこととは

A 短期大学子ども学科必修科目「子どもの理解と援助」の中に、「子どもに対するかかわりと共感的理解」の内容がある。保育者をめざす学生は、自分自身の人とのかかわり方についてふり返るきっかけにもなり、共感的理解の態度を身に付けていけるように学ぶ良い機会であった。カウンセリングにおいて求められる本質的な態度の一つとして、共感的理解の態度がある。カウンセラーに限らず、さまざまな対人援助の仕事には大切な態度である。本稿での「共感的理解」は、請川の「子どもの気持ちに寄り添って子どもを理解しようとする態度」とする。特に子どもを理解しようとする態度がポイントになる。学生は日常的な人とのかかわりの中で、共感したりされたりという経験がある。自然と身に付いている者もいれば、共感してもらった経験から自分も相手に共感したいと思い、実行に移した者もいる。共感的理解を身に付けることは、技術として練習を重ねていくことで可能になる(表1)。

授業では、共感的理解を意識的に行う練習を行った。4(5)人グループになり「朝起きてから、この授業の始まるまでのこと」について3分間話した。グループの中での役割として、1人が話す役、1人が聴く役、2(3)人が観察者役に分かれた。聴く役は、相手に合わせ、相槌、繰り返しを意識して聴くように行った。3分後、観察者役から、聴く役は

表1 共感的理解を身に付ける練習方法（例）

- 相手と波長を合わせることをまず行う。
楽しくて明るい話では、同様に明るく楽しく、悲しく沈んでいる話では、同様の雰囲気を作り、相手の世界に少しずつ近づいていく。
- 次に、相手の話に相槌をうつ。
相手に合わせた相槌は「話を聴いてもらえている」と相手は感じ、共感的な雰囲気を表現できる。
- さらに、視線を合わせたり感情を繰り返したりする。
相手が自分の感情に気付き、共感してもらえたという感覚をもつ。

相手に合わせていたか、相槌はできたか、繰り返しが使えたか、話す役は話を聴いてもらえた感じがしたかなどをフィードバックした。全員が役割を行った後で、グループ内でシェアリングを行い、自分自身をふり返った。学生の感想は、以下のとおりである。

- 相槌を打って話を聴くことを意図的にしてみたが、きこちない感じはしなかった。
- ただ話を聞いているだけではなくて、相手の気持ちをわからないといけない。
- 相手によって態度や話し方を変えるとより共感しやすいことがわかった。また、質問をすることで自分に興味を持ってくれていると思えるので的確な質問をすればするほど良いことがわかった。
- 適切なかかわり方が難しいので、共感的理解までいきつかない。
- 人の心に寄り添う言葉がけの質を上げられるようになりたいと思った。

シェアリングのあとは、全体で「話を聴いてもらえた経験」について話してもらった。自分と同じような場面や全く違う場面、どのような経験か思い出せないなどさまざまな話が出た。人の話を聴いて、改めて共感をしていた学生もいた。

2. 子どもに対する共感的理解

複数の子どもが対象となる保育の現場では、肯定的な気持ちとその反対の気持ちとが同時に起こってくる。保育の中で共感的理解が難しいのは、複数の子どもがいて多様な子どもたちを相手にしているためである。

保育者が子どもの気持ちを受けとめ、適切に対応していくことは基本的なことであるが、このような対応から子どもが保育者を信頼し安心して過ごすことができる。子どもたちとの遊びに保育者が入る場合は、集団での子どもたちの理解を深め、必要な援助が何かを得て、援助が行えるようになり、共感的理解に努めていくことにつながっていく。保育現場で共感的理解を示していくことは難しいものである。子どもの気持ちがかかるからこそ、保育者の思いが前面に出てしまい、共感的理解には程遠い現実をもたらしているものである。

そこで学生には事例を通して考えさせた。事例は、テキスト『子どもの理解と援助』を使用した。以下の記述は、子どもの言動に共感的理解を示そうとした内容である。事例か

ら共感的理解を示す方法として、

- ① 保育所等での子どもの言動が記載された文章をじっくりと読み、自分が保育者としてその場にいと想定して、その状況をイメージする。
- ② 個々の子どもの言動について、その子どもがどのような気持ちで、そのような言動をしているのか、その子どもの気持ちを考えてみる。
- ③ 書き出した子どもの気持ちに対して、あなたがその場にいる保育者ならどのようなかかわりをするか考えてみる。
- ④ グループでお互いが書き出した気持ちやかかわり方について話し合う。グループのメンバー間で、回答が似ている、異なっているなど意見を交換し、他者の意見を聴きながらあらためて自分自身の考えをとらえ直せることは大事な視点である。

子どもの気持ちやかかわり方をまとめるワークシート（表2）に記入し、話し合いを進めた。子どもの言動、子どもの気持ちや感情、あなたのかかわりの3点について記述した。

表2 子どもの気持ちやかかわり方を考える

子どもの言動	子どもの気持ちや感情	あなたのかかわり

出典：「子どもの理解と援助」児童育成協会、森俊之

学生の感想等は、以下のとおりである。

- ・子どもがわかるように伝わりやすいような説明をするなど、なぜこのようになったのかを理解できるように伝える。
- ・子どもに寄り添いほめたり笑顔でかかわったりする。あまり深く質問をしない。
- ・子どもの個人差に留意しながら固定的な意識を植え付けないようにすることが大事。
- ・ありのままであることや相手に心を寄せたり尊重することなど、言葉の意味としてはわかることでも、実際、行動に移したりする場合にはとても難しいと感じた。

事例では、1対1での保育場面であったので、子どもの言動から子どもの気持ちや感情を受容することは考えやすかったと思われる。では、「自分がその保育者だったら」とイメージを膨らませていくには、経験が少ない分、記入することができない学生もいた。グループでのシェアリングの中で共感的理解を示す方法④（前述）を行うことによって、新たな考えをもつことは十分可能であった。

II. 実習を通しての共感的理解

1. 共感的な態度を省察

A 短期大学子ども学科では、1年後期の集中講義の期間に保育実習Ⅰ、2年前期に幼稚園教育実習Ⅰの実習がある。学生の実習の全体的な省察から思いや考え、行動を示してみた(表3)。

表3 幼稚園教育実習Ⅰをふり返って 良かったこと 楽しかったこと 頑張ったこと

幼稚園の生活や行事を知ることができた。 体調を崩さなかったこと。 いろいろな遊びに参加し、それぞれの世界観を知ること。 子どもとかかわること。 子どもたちが寄ってきてくれた。 子どもたちが「あそぼう」と言ってなついてくれたこと。 エプロンのしかけにたくさん興味をもってくれた。 担当クラス以外の子どもたちともたくさんかかわった。 子どもたちからお手紙をもらった。 さまざまな手遊びを知ることができた。 読み聞かせのコツがわかったこと。 先生方にたくさん教えていただけたこと。 主活動で作ったおもちゃで子どもたちが楽しそうに遊んでいた。 感謝されることがうれしかった。 自分の新たな課題を見つけることができた。 一つのクラスで各年齢の発達を知ることができた。 クラスの人数が少ないのでしっかりと保育を学ぶことができた。
--

学生は、実習中では、あえて子どもたちへの共感的な態度を意識していたとは考えられないが、自然と共感的にかかわっていたことが伺える。例えば、「子どもたちが寄ってきてくれた」、「子どもたちが『あそぼう』と言ってなついてくれたこと」、「エプロンのしかけにたくさん興味をもってくれた」などの子どもたちとのかかわりでは、共感的に子どもたちと接することができたのではないか。これは、「良かったこと、楽しかったこと、頑張ったこと」というプラスの思考・感情・行動から出てきた点であるため、当然の結果である。文部科学省の『幼児理解と評価』の中では、「一人一人の幼児と直接に触れ合いながら、幼児の言動や表情から、思いや考えなどを理解しかつ受け止め、その幼児のよさや可能性を理解しようとする」とあり、学生の実習でのふり返りは、子どもたちの姿を共感的に理解しようとしたことがわかる内容である。笠井は、共感的関係を築くためのポイントとして、「子どもを肯定的に捉える」、「保育者が子どもを受け入れる枠を広げる」と述べ

ており、保育者の心持ちとしては、焦ったり慌てたりせずにゆったりとしたゆとりのある精神をもつことが共感的理解の態度の育成につながっていくのである。実習期間中は、ゆとりある時間をもつことはできないが、共感的な心の通い合いを子どもたちと共有し、担当教諭からの指導をしっかりと受け止めて実習に取り組んでいた。

また、保育者目線で子どもたちと接することによって、「子どもがより楽しいと思えるにはどうしたらよいのだろう」と、担当教諭から手遊びを学んだり、読み聞かせのコツを教えてもらったり、実習中の指導を素直に受けていた。習った技術を単純にこなすという対応をするだけでなく、共感的理解につなげるためにも知識をより吸収して、スキルアップをめざすような向上心も出てきたようだ。実習中は、どの絵本を読もうかと準備し、繰り返し読み聞かせの練習を行い、子どもたちとかかわっていこうとする姿勢は、良かったことや楽しかったことを経験したからこそ、共感的理解の態度につながったものと考えられる。さらに、気付いたことや勉強になったことなど省察を進めた（表4）。

表4 幼稚園教育実習Ⅰをふり返って 気付いたこと 勉強になったこと

保育者の日々の努力。
事前に準備をたくさんしていることがわかった。
次の行動を考えて早くする。
先生方が子どもをまとめることの大変さ。
見守ると見ることは違う。
子どもの前に立つときは堂々とする。
保護者との連携の大切さ。
子どもたちが登園する前の環境構成の大切さ。
先生のタイプによってクラスの様子や雰囲気が違っていった。
自信をもって行うこと。
子どもの行動を予測をすること。
子どもの意識を活動へ向けること。
同じ年齢でもできることできないことがあった。
子どもに合わせて言葉がけや距離感を考えることが大切だった。
声かけの一つ一つに意味があることを知った。
ピアノを弾く前の声かけをすること。
ゲームを行う際、ルールのわからない子の対応をすること。
手遊びでは盛り上がりのポイントを作ることとレパートリーを増やす。
絵本の読み聞かせでは抑揚をつけて惹きつける。
制作では、けがに配慮する。
子どもたちはあいさつをしっかりとっていた。
子どもたちはいろいろな経験から学んでいる。

実習を全体的にふり返った内容ではあるが、実習での共感的な場面は、子どもとのかかわりだけではなく指導教諭をしっかりと観察して、その先生の行動からの気づきが挙がっている。例えば、「子どもの行動を予測すること」、「子どもの意識を活動へ向けること」、「子どもに合わせて言葉がけや距離感を考えることが大切」、「ゲームを行う際、ルールわからない子の対応」などである。この省察の内容は、大学での演習でも同様の事例は紹介されていたし、筆者が紹介した事例も実習では似たような展開があった。そのような事例の学びを踏まえて、気づきや学びになった点は、「学生の意欲の向上が共感性につながる」と秋政が話した点と一致するのではないか。共感的な態度を示したいと共感を深めようとする保育実践は、意欲をもって保育に向き合うことになり、それは、共感を広げたり深めたりする点では重要な視点になった。

2. 子どもへの対応での困難や苦勞

次に、実習中の困難や苦勞についてふり返ってみた（表5）。ピアノの弾き歌いや絵本の読み聞かせなどの保育技術についての苦勞と、それと同等に挙げたのは、子ども同士のトラブルについての困難だった。保育現場ではこのようなトラブルは起こって当然の出来事であるが、このトラブルが保護者からのクレームとして表面化してくる場合もある。梅田らは、「クレームをチャンスと捉えることで、よりよい子どもや保護者とのかかわり、ひいては子育て支援に繋がると考えられる」とクレームを肯定的に捉えることは重要な考え方だと述べている。そして、「喧嘩やぶつかり合いも体験として重要な意味があり、それらを通して共感や思いやりなどを学んでいく」と続け、子どもたちの行動を考えて保育者のかかわり方を見直していくことが求められると指摘している。より子どもたちを受容し、共感的な態度を取ることが重要になる。

実習での子ども同士のトラブルでの対応は、学生にとっては大きな困難であった。大学では演習で学んだだけだったため、子どもたちの気持ちを受け止めて共感する態度は重要だと思っただけなのに、保育現場で実際の対応には不慣れなために、気持ちを受け止めることや共感する態度とは、具体的にどのように行えば良いのだろうと戸惑ってしまった。高橋靖幸は、「対人葛藤場面の対応では、けんかやいざこざの解消のため子どもたちへの共感的な理解が求められるが、同時に『子どもの心を共感的に理解すること』は『子どもたちのけんかやいざこざを解消すること』によっても評価され判断されているのである」と述べている。つまり、共感的理解の態度を取ることと、目の前の子どもたちのトラブルをどう解消して仲裁がうまくできたかどうかは、違う解釈として考えることになる。本稿での共感的理解とは、「子どもの気持ちに寄り添って子どもを理解しようとする態度」のことであり（「I 共感的理解について」参照）、トラブルの解消や仲裁方法を考えるということは、本稿の目的と違ってしまう。確かに、子どもの気持ちを受容して共感的な態度を取ることが重要であるが、トラブルの解消をどのように行うのかという問題については、ここ

表5 幼稚園教育実習Ⅰをふり返って 実習中の困難と苦勞

実習記録を毎日書くこと。
部分実習の全て。
部分実習のつなぎ部分がうまく話せなかった。
責任実習で1日を通したこと。
朝の歌や手遊びを始める前に声が届かなかった。
朝の会、帰りの会の進め方がうまくいかなかった。
絵本を読む前の手遊び。
絵本を読むときに集中させること。
絵本を読むときの導入の仕方。
ピアノの弾き歌い。
実習期間中のピアノの練習をする時間の確保が難しかった。
子どもたちを引きつけること。
大きな声を出して子どもたちに伝えること。
話を聞けない子どもが外に飛び出してしまった時。
活動で動くことが多く大変だった。
一日の生活の中で疑問をもつこと。
子どもたちの名前を覚える。
一人一人に合った言葉がけや対応の仕方。
子ども同士のトラブルの対応に困った。
トラブルの際、お互いが納得いくように話し、解決させること。
泣いている子どもの対応。
トラブルが同時に起きてしまった時。
子ども同士のトラブルにどのタイミングで介入すれば良いか。
睡眠時間の確保。
消毒や水拭きなど掃除を丁寧に行うこと。
子どもの姿を学びきれなかった。

では取り上げることはしない。保育現場において、経験の浅い若い保育者とベテラン保育者ではトラブルへの対応の仕方は違う。トラブル解消や保護者からのクレーム対応だけに視点を向けず、子どもたちと保育者、保育者間の信頼関係の構築を進め、共感的理解の態度の向上をめざすことが重要である。実習において、ポジティブな感情とネガティブな感情の両方を体験することによって、ふり返りの中から共感的理解の態度をどのように捉えていたのかを、学生自身がふり返り、次の実習へ向けての課題とすることができた。

Ⅲ. 保育現場での共感的理解の実際

1. 共感的理解の実際

上山らは、「子ども理解は、密接に子どもの発達に関わっている。(中略)子どもの行動特性だけでなくその時の活動場面や状況にも影響される」と述べており、保育者がどのような対応をするか意思決定について検討している。また、共感的見方では、子どもの考えや思いを指している。

これらを踏まえて、卒業生2人には、①共感的理解をどのように行っているのか、②共感的理解の事例、③学生時代に共感的理解を身に付けるにはどうしたら良いか、について聞いてみた(表6)。さらに2人の協力を得て、保育現場での共感的理解でのエピソードを紹介してもらった。A先生は私立保育園勤務6年目、B先生は私立幼稚園勤務5年目である。2人には、本研究の目的を説明し、個人が特定されないようプライバシーの保護に努めることを伝え、承諾を得た。卒業してから5～6年経った2人は中堅保育者として勤務をしているので、職場内では新人育成を担ったり、学年主任として学年をまとめたりと責任ある立場になっている。同じ学年の先生たちとは常に声をかけ合って子どもたちには

表6 保育現場での共感的理解

<p>①共感的理解をどのように行っているのか</p> <p>A先生：子どもの話をとにかくしっかりと聴く。気持ちだけでなく、何をしていたのか、どのようなことが起こっていたのかも聴く。</p> <p>B先生：どんな場面でも子どもたちの話に耳を傾け、子どもたちの考えや想像力を大切にしている。子どもが怒りや悲しみで泣けてしまい、自分の気持ちを爆発させている時は、他の子どもの影響のない場所で、子どもの気が済むまで泣いたり怒っていいよと伝え、落ち着くまで静かに受け止めている。</p>
<p>②共感的理解がわかる事例</p> <p>A先生：泣きながら登園した子や製作ができなくて泣いている子に寄り添い、登園した子にはよく来たねと話し、製作中に泣いてしまった子にはどこからできなくなったのか聴いた。</p> <p>B先生：</p> <p>〈アンちゃんの場合〉保護者と姉がお休みで自分だけが保育園へ。家に居たいと怒り泣きわめく。アンちゃんの話しを聞きながら部屋一角で怒りをぶつける時間を作った。しばらくすると落ち着いてきた。</p> <p>〈ケイクんの場合〉白のクーピーを窓ガラスにお絵描き。ケイクんを注意した。なぜ窓ガラスにお絵描きしたのか聞いたところ、白い紙に描いても見えないから窓ガラスに描いたとか。ケイクんと一緒に白いクーピーでも見える紙色を探した。</p>
<p>③学生時代に共感的理解を身に付けるには</p> <p>A先生：実習中が一番わかりやすいと思うので、とにかく担任の先生の様子をしっかりと観て学ぶ。</p> <p>B先生：固定概念を捨てる。想像力を豊かにする。自分の意見を相手に押し付けない。どんなに忙しくても余裕をもって相手の話を最後まで聴く。</p>

分け隔てなく同じ接し方を行い、子どもたちの様子は常に話し合える環境づくりにも努めている。

共感的理解の態度については、現場で学ぶことが多く、困難な場面では先輩に聴いたり子ども同士のトラブルは先輩や主任と一緒に介入したりして、態度の向上に努力しているようだ。こういう場合はこうだという進め方があったとしても、子ども一人一人にきめ細やかな対応を行うには、一辺倒の進め方がそぐわない場合も出てくる。共感的理解の態度については、他の保育者との話し合いや研修会などの機会があれば他の保育者と語り合うことで、他者からのフィードバックから自分自身の再確認の場を設けることが重要になってくる。この取り組みはいずれ保育の質の向上にもつながっていく。

2. 学生に対して共感的理解を育成する

卒業生2人には、学生時代に共感的理解の態度を身に付けるにはどのような方法があるのかを考えてもらった。A先生は実習で担当教諭から学ぶこと、B先生は日常生活から学ぶことが共感的に理解することの育成になると話した。確かに講義時間の90分間だけでは、共感的理解を教えて実際に態度の育成は難しい。そうなると、日常生活のどこかで共感的理解を意識して理解しようとする態度につなげていくことになる。半澤らは、共感されたときに得られると考えられる効果について、「安心感を得る」、「自分自身に目が行くようになる」、「自己理解が深まる」、「自分を受けられるようになる」と4つにまとめた。共感された経験をすることで共感することができるようになり、「身近な人同士で相談しあい、助け合うことも、重要な支えとなる」と述べている。経験が少なかったり自信が持てなかったりする場合も考えられるが、「相手の立場に立って相手の気持ちを理解しよう」としたり、共有しようとしたりすることで、十分相手の役に立てるのだということを示すことができる」と友人や家族などのかかわりの中で共感的理解を経験することが可能になる。また、尾崎らは、「悩み相談に乗る際に、相談者の立場や気持ちを理解しようとしながら積極的に聴いて疑似体験すること」と述べており、ただ単に相談に乗るのではなく、気持ちを受容することがポイントになる。学生が共感的理解な態度を育成していくには、日常生活において意識していることが態度の向上に結び付いていくことが明確になった。

IV. 考察

本研究では、保育現場における両義的な場面での共感的理解の態度を身に付けるために、保育者養成校での演習・実習と卒業生の実践を通して検討していくことを目的として、学生が学んだ演習・実習での省察をまとめ、卒業生の実践を紹介した。

1. 共感的理解と子どもへのかかわり方

(1) 保育者と子どもの1対1での共感的理解

学生が実習中に子どもとかかわるのは、1対1での対応からがほとんどである。担任とあらかじめどこへ入るといいのか、言葉がけのタイミングや遊びでの注意点を聞いておけば、安心して子どもたちとかかわれるようになる。子どもたちから寄ってきてくれたりなついてくれたりしたことを、良かったこと・うれしかったことで挙げた学生は、子どもたちの世界をともに楽しんでいたことがわかる。

子どもにとって遊びは重要である。そのためには、遊びを保障するための環境や条件を整える必要が保育者には求められる。この環境を設定するために、学生の省察の中にも挙げられていたが、保育者は日々努力して、登園前と降園後にしっかりと準備を行っていたのである。その環境がしっかりと構成されていたので学生は園の一日の流れを知ることにより、子どもたちに向き合うことがようやくでき、自発的な活動としての遊びを通して、共感的理解の態度を示すことは可能なことになった。

子どもたちとのかかわりでは、まず声がけから始めるが、活発に自分から話す子どもに対しては声をかけやすいが、遊びに集中している子やおとなしい子など自分からなかなか話さない子への声かけには苦勞していた。これは、学内でもグループ活動等で活発に話し合いができる場所と黙々と作業を進めるところと学生は自分たちの学生生活にも同様なことが言えるわけである。声かけには一つ一つの意味があることを知った学生は、子どもたち一人一人に合った接し方が重要なことは理解したものの、具体的にはどう動けばよいのかわからない様子で、子どもを観察していた。また、指導教諭にその都度聞いたり、反省会で聞いたりして、具体的な動きについて確認していた。これは、共感的理解を示す以前のことであり、まずは状況をよく観て把握することが大事な点である。ある管理職は、共感的理解の態度を身に付ける方法の一つとして、「実習中はとにかく保育者と子どもの関係をしっかりと観察してもらうことが大事だ」と話した。保育者と子どものやり取りを見て聞いて客観的に捉えること、そしてそこから感じ取っていくことにより共感的理解の態度の育成につながっていくのである。

(2) 保育者と複数での共感的理解

集団生活を送っている保育現場では、1対1での対応ばかりではない。クラスでは複数の子どもたちが生活しているため、その中で共感的理解の態度を示していくことはかなり困難になる。ましてや、「一人一人を大切に理解しながら」ということはできないまま、子どもたちとかかわっていくことが予想される。請川は、「困難ではあるけれど、クラスという大きな集団の中に遊びを中心としたいくつかの小集団ができてくれば、その遊び集団ごとに子どもを理解し援助していくという方法が導き出せます」と述べており、場を設定して遊びの材料を準備することにより複数でもその集団を通して一人の子どもを捉えることが可能になるのだ。子どもたちに寄り添うことによって共感的理解を進めていくことは、一人で遊んでいた時とは違う子どもの一面にも触れることになり、保育の目標や遊び

の目的から子ども理解へつながっていくのである。請川は、「子どもに共感するからこそ、子どもの理解者にもなれるし、子どもと同じ立場・目線に立つこともできるのです」と締めくくっている。卒業生は中堅保育者として今も働いているが、二人は「子どもの話をとにかくしっかりと聴くこと」を一番に話した。気持ちや出来事をじっくりと聴くことによって、子どもは聴いてもらえた安心感を抱いた。これは、共感して子ども理解を行うための重要な部分である。

2. 両義的な場面での共感的理解

複数の子どもたちへの共感的理解の態度を示すことは困難だが、その理由として挙げられるのは、保育は両義的な場面が繰り返されているからである。学生へは、実習前に『子ども理解』の事例で両義的な場面を紹介した。それは「新品の真っ白な靴を履いてきた子どもが水たまりに入って遊びたがった場合、あなたが保育者ならどうするか」である。事例では、子どもとその保護者の気持ちを考えて、「思い切り遊んでほしい」、「やめてほしい」という気持ちの間で悩んだものだ。二つの意味や価値で困惑する様子を両義的と表現することを伝え、学生自身にも似たような経験があったかを聞いた。事例では一人の子どもを相手にしているが、子どもとその保護者が関係している。このような場面が集団になると、共感的理解がかなり困難になってくる。榎澤は、子どもたちの遊びの中での両義的な在り方について、「子どもたちの遊びにかかわる保育者は、目的志向的な在り方をすることもあれば、遊ぶ在り方をすることもあることがわかる。どちらかの在り方をとっていることもあるが、二つの在り方の間で終始揺れ動くというように、両義的な在り方をすることもある」と述べており、子どもたちとのかかわりにおいては、子どもの気持ちや考えをまずは受容し、子どもが主体的に活動できるように環境を整えていくためには、二つの気持ちを行ったり来たりしながら子どもとのかかわる難しさを考えさせたのである。両義的な場面での共感的理解は難しいところだが、理解しようとするには、一つの事例から自分の考えを例えばグループワークでシェアリングして、相手の意見を聞くことは大事な作業になる。

学生には、日常生活の中で共感的理解を意識して友人や周りの人とかかわることを勧めていく。サークルやグループ活動、時には授業の内容にロールプレイを取り入れるなど体験を促す。人と違う意見や考えは、両義的な場面での子どもへのかかわり方のヒントになるであろう。また、共感的理解にはポジティブな言葉を使うことによって、プラスのメッセージには気持ちを寄せやすいため、日常会話の中でも進んで使うようする。子どもの心情がわかるためには、子どもたちの体験を保育者も体験し、子どもたちの気持ちをわかろうとするその行動が、共感的理解の態度を向上させていくことであり、必要になってくる。森は、「保育士が子どもの気持ちを受けとめながら、適切に応答していくことは、保育の基本とされる。こうしたかかわりが継続的に行われることを通して、子どもの人に対する信頼感は育まれていく」と述べているように、基本を忘れずに子どもたちとかかわること

をめざし、学生自身の成長を支援していくことは保育者養成校として欠かせない点である。

おわりに

卒業生の中には、学生時代に子どもたちとの交流を繰り返して保育者への夢が膨らみ、現在は長く勤めたいとさらに希望を持って保育者として頑張っている者もいる。学生にもその卒業生のように夢や希望を抱いて、保育者として勤めてもらいたい。そのためには、体験を繰り返して、少しでも自信をつけてほしいものだ。特に子どもたちとかかわる経験が少ない学生たちは、どのように子どもたちとかかわっていけばよいのか戸惑い、考えすぎてしまう場合がある。対応の難しさに加えて、保育者が子どもたちの気持ちを共感的に理解することについては、勤め始めてからも自己研鑽を続けていき、共感的理解の態度の向上をめざすことになる。

学生は、実習時の実践や指導教諭、現場の保育者から学ぶことが重要になってくる。保育者と子どもの1対1の関係と保育者と複数の子どもの関係で、どこに焦点を当てて共感的理解を進めていくのかは学生にとっては、かなり難しいところである。この後に続く、幼稚園教育実習Ⅱや保育園実習Ⅱの実践時に共感的理解の態度については学んだことを活かし、共感的な態度を身に付けて自信をつけていく指導支援を今後も進める。

保育現場においても経験年数の少ない保育者にとっては、共感的理解についての難しさは同様の思いなのかもしれない。保育での適切な子どもたちとかかわり方についても考えていき、保育者と子どもたち、保育者同士、そして保護者と保育者の良好な人間関係を築いていけるようにすることは、今後のさらなる課題である。

なお本稿は、日本保育学会第74回大会において発表したものを一部修正したものである。

註：

秋政邦江 中山芳一 伊藤智里 (2009)「保育者の共感性向上のためのカリキュラム開発 —絵本を教材とした共感意欲向上カリキュラムを中心に—」川崎医療短期大学紀要 29号 pp.43-48

上山瑠津子 杉村伸一郎 (2018)「保育における子ども理解の研究動向 —保育者の認知過程の観点から—」幼年教育研究年報 第40巻 pp.61-71

請川滋大 (2020)『子ども理解 一個と集団の育ちを支える理論と方法—』萌文書林 pp.37-40

梅田裕介 西垣吉之 西垣直子 水野友有 野田敦敬 (2019)「保護者のクレームに保育者が肯定的なまなざしを向けることの意味 —「子育て支援」及び「人間関係の発達理解」の視点から—」愛知教育大学教職キャリアセンター紀要 vol.4 pp.137-144

榎澤良彦 (2009)「子どもの活動を支える保育者の両義的在り方」淑徳大学総合福祉学部研究紀要 43pp.1-16

尾崎加奈 富田真弓 (2020)「大学生の悩み相談に乗った経験が獲得的レジリエンスに及ぼす影響 —共感性とポジティブな評価に着目して—」久留米大学大学院心理学研究科 19巻 pp.13-21

- 笠井佳代子（1999）「子ども同士及び子どもと保育者の間に共感的関係を築くための一考察 —保育者の園生活における事例研究を通して—」日本保育学会大会研究論文集 52 pp.318-319
- 厚生労働省（2018）『保育所保育指針解説』
- 厚生労働省（2020）「保育の現場・職業の魅力向上に関する報告書」
- 高橋靖子 木野和代（2020）「保育者の望む「保育者の共感的関わり」に関する質的検討：母親へのインタビューに基づいて」愛知教育大学教職キャリアセンター紀要 vol.5 pp.69-75
- 高橋靖幸（2017）「子どもの対人葛藤場面における保育者のかかわり —「実践の方法」に着目した保育と学生指導のあり方について—」新潟人間生活学会『人間生活学研究』8巻 pp.89-101
- 半澤歩 渡部玲二郎（2008）「日常的な相談場面における「共感されること」の効果」茨城大学教育学部紀要 57号 pp.207-219
- 森俊之（2019）「子どもに対するかかわりと共感的理解」児童育成協会『子どもの理解と援助 新・基本保育シリーズ』中央法規出版 pp.13-21
- 文部科学省（2018）『幼稚園教育要領解説』
- 文部科学省（2019）「幼児理解に基づいた評価」

